

# 落雁

「いつも、新聞の上で二人で落雁食べてたよね。いまでもその後ろ姿をよく覚えてる」。

晩年ずっと入院していた祖母を見舞いに訪れたときにそう言われたことを思い出した。幼少期、祖父と二人で仏壇の前に新聞を敷いてお供え物の落雁を食べていた。落雁は蓮の花の形をして、ピンクと緑と白の三段だった。それを小さい僕でも食べやすいようにと祖父がごつごつとした大きな手で細かく砕いてくれた。建設業を営んでいた祖父の手からは軽油の匂いがした。少し大きくなってから、「おいしかった」という記憶のままに落雁を食べたことがある。正直、そんなにおいしいものではなくてがっかりした。記憶は「おいしくなかった」に上書きされた。落雁をよく食べていたのはまだ就学前のころだったので、その「おいしかった」という記憶が確かなものだったのか確認するために母に尋ねてみると「いつもお墓参りに行くとそこら中に落雁が供えてあったから、すごい食べたそうに見てたよ」という答えだった。小さい頃の僕はどれだけ落雁に恋い焦がれていたのだろう。

僕はあまりグルメではない。むしろどちらかというと「食」にあまり関心がないのかもしれない。空腹を満たせばそれで良いと思っている。気がつけばファストフードやコンビニ弁当、カップラーメンばかりを食べている。撮影現場でも食事休憩の時がもどかしい。可能なら早く食事を済ませて撮影を再開させたいとヤキモキしている。ただ他の多くのスタッフたちはおいしいロケ弁やケータリングを食べると士気が高まるので僕も周りと同調するようにしている。

そんな自分は「食べる」ということに関して考えを巡らせるとどうしても幼少期に辿り着く。何かを食べて「おいしい」「幸せだ」と感じていたのはあの頃だったような気がする。その数少ない「おいしい」と感じていた記憶が密接に僕の幼少期の思い出に結びついている。

小学生くらいの頃、祖父が経営していた建設会社では年末になると市街から少し離れた資材センターの倉庫で餅つき大会をしていた。いつもは建築資材やフォークリフトなどが入っている倉庫に、木製の大きなテーブルがL字に配置されていた。倉庫の中心には杵と臼が置かれ、それを取り囲むように並べられたパイプ椅子に大工さんたちが座っていた。祖父の建設会社に勤めていた父と大工さんたちが代わる代わる餅をつき、同じく働いていた母や祖母、女性従業員たちがつき立ての餅を四角や丸の形にしたり、あんこ餅やよもぎ餅にしたりしていた。テーブルの上には次々と完成した餅が並び、倉庫内には餅米を炊いている湯気と甘い香りが充満していた。「お前もつけ」と大工さんたちに杵を渡されよく僕も餅をついていた。小さくて力のなかった当時の僕には杵は大きくて重たく、うまくつけた試しがない。「なんだ全然ダメだな」と周りの屈強な大工さんに茶化されるのが嫌になり、次第に餅をつくことをしなくなった。

祖父母の家は実家から歩いて数分のところで、両親が共働きだったこともあり、小さい頃からよく一人で訪れていた。祖母は家で経理などの仕事をしていた。それを横目に祖父のお菓子が入っている引き出しを開けては色々なものを食べていた。黒糖や氷砂糖、金平糖など甘いものばかりが入っていた。その中でも水飴が特に好きだった。箸で白くなるまで練って食べていた。スルメイカもよく食べていた。夕方になると祖父が仕事から帰ってきて、スルメイカを大きなハサミで細長く切り、ストーブの上にアルミホイル敷いてその上に乗せると、香ばしい匂いが居間に漂った。自分の家にはないそれらの食べ物が大層おいしく、ご馳走に思えた。

なぜ祖父はそんなに甘いものばかりを食べていたのかと母に聞いたことがある。「自分が小さいころ、そういった甘いものが食べられなかったから、その反動ではないか」という答えが返ってきた。祖母は幼少期に樺太から札幌へとやってきて祖父と出会った。祖父母は二十代で会社を立ち上げ、二人三脚で生きてきた。僕が二十歳を過ぎたころ、不況の波に煽られ自分たちが立ち上げた会社を退き、家を売り、小さなアパートの隅でひっそりと暮らした。二人はどんな状況においても、二人だった。僕はそのアパートにもよく訪れていた。小さい頃と同じように水飴を食べながら話をしてきた。「お前は綺麗な手をしている、じいちゃんみたいに汚すんじゃないよ。そして絶対に人に使われるような人間になるな」と祖父は僕に言った。僕は彼の人生に思いを馳せながら、その言葉を受け止

めた。そのとき食べた水飴は記憶と同じように、おいしかった。それから一年もしないうちに、祖父は亡くなった。

「どうして人生はうまくいかないもんかね」と少しの間を空けてから、祖母は病室のベッドから窓の外をぼんやりと眺めて僕に言った。小さい頃は気付かなかったが、二人はそれぞれの足りない部分を補い合っているように思えた。それは一人になった祖母の姿を見たときに、そう感じた。「少しの間」で祖母は何を思ったのだろう。もしかしたら、祖父と小さかったころの僕が落雁を食べていたその後ろ姿に、ある日の幸福を見たのかもしれない。(1966文字)